みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

SER no.156; Preface

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-12-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岸上, 伸啓 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009993

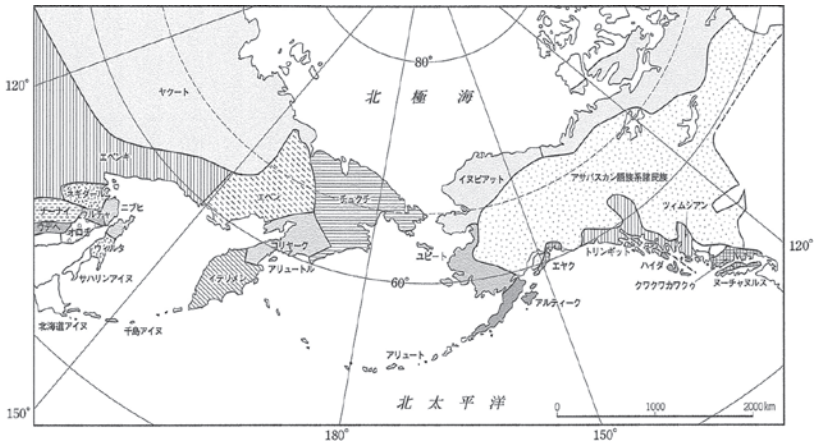
はじめに[1)]

岸上　伸啓
（国立民族学博物館）

1　環北太平洋地域の先住民社会に関する比較研究の歴史

19世紀以前から欧米ロの毛皮交易者や民族学者らは北太平洋沿岸のシベリア側とアラスカ側の先住民文化が類似していることに気づいていた。そして彼らは両地域間の先住民文化の間に歴史的関係があることを想定した（地図１）。19世紀末から20世紀初頭にかけてアメリカ自然史博物館のF. ボアズ（Boas）は，ベーリング海峡を隔てた新旧両大陸間の先住民文化の歴史的関係を解明することを目的としてジェサップ北太平洋調査（Jesup North Pacific Expedition）を組織，実施した。この国際プロジェクトにはアメリカ人やロシア人の民族学者が参加し，成果としてチュクチやコリヤーク，ハイダ，クワクワカワクゥなどの先住諸民族に関する11巻，31分冊を刊行した。これらは，環北太平洋地域の先住諸民族の社会と文化に関する重要な基礎文献となった。その一方で，ボアズらは新旧両大陸の先住民族間の文化や社会には類似性とともに差異が存在していることを指摘したが，歴史的関係を明確に実証することはできなかった（Boas 1968; 2001）。

その後，ロシア帝国の崩壊とソ連の成立によって，米ソ間での学術交流や共同調査は困難となり，第二次世界大戦後は米ソ間の冷戦のために国境地域での共同調査はさらに難しくなった。このため半世紀以上の長きにわたって北太平洋沿岸の先住民文化に関する国際共同研究を実施することができなかった。しかし，1980年代半ばにソ連において



地図１　環北太平洋地域の先住諸民族の分布
（出典：岸上 2015: 8）

ペレストロイカが始まると，米ロ間での学術交流が再開した。米国のスミソニアン協会国立自然史博物館（National Museum of Natural History）の W. フィッツヒュー（Fitzhugh）は，ロシア人研究者らとともにベーリング海峡・ベーリング海周辺の北太平洋沿岸の先住民族文化に関する国際共同研究プロジェクトを立ち上げ，その成果として1988年に展示「大陸の交差点――シベリアとアラスカの諸文化」（Crossroads of Continents: Cultures of Siberia and Alaska）を開催した（Fitzhugh and Crowell 1988）。

ほぼ同じ時期に日本では北海道大学（後に京都大学）の宮岡伯人がリーダーとして北太平洋沿岸地域の先住民言語に関する比較研究プロジェクトを開始した（宮岡編 1992）。宮岡は，大学院生ら若手研究者を新旧両大陸の北太平洋沿岸地域の先住民社会に派遣し，地道な言語学調査を実施させた結果，同地域の先住民言語に関する膨大な基礎データが蓄積され，言語学分野の発展に貢献した。一方，新旧両大陸の先住民言語間の歴史的関係については十分に解明することができなかった。その後，米国のスミソニアン協会国立自然史博物館の I. クルプニク（Krpunik）は，アメリカ自然史博物館の L. ケンドール（Kendall）らとともに，ジェサップ北太平洋調査以降の100年間の先住民社会における諸変化を検証するためのプロジェクトを実施した（Kendall and Krupnik eds. 2003; 谷本・井上編 2009）。

1990年代後半から2002年にかけて国立民族学博物館の大塚和義は，環北太平洋地域の先住民交易とその諸影響に関する共同研究プロジェクトを立ち上げ，その成果を国立民族学博物館の2001年度特別展示「ラッコとガラス玉」で公開した（大塚編 2001; 2003）。その後，岸上伸啓は，アラスカ大学の D. ケスター（Koester）やアリゾナ大学の B. コロンビ（Colombi）らとともに国際シンポジウム「北太平洋沿岸諸先住民文化の比較研究――先住権と海洋資源の利用を中心に」を2014年１月に国立民族学博物館において開催し，環北太平洋地域の先住民文化の比較研究の学術的重要性と必要性を指摘した。また，そのシンポジウムを契機にワシントン大学の B. フィッツヒュー（Fitzhugh）やアラスカ大学の T. ソーントン（Thornton）らを中心とする研究者の国際的なネットワーク化の試みが始まった（岸上編 2015）。しかし，環北太平洋地域の先住民文化の比較研究は1990年代の時期と比べると停滞し続けているとともに，研究者間の国際的ネットワーク化も成功したとは言えないというのが実状である。

2　環北太平洋地域の先住民に関する共同研究について

岸上伸啓は，B. フィッツヒューらと研究者の国際的なネットワーク化について協議を続ける一方で，日本国内で環北太平洋地域の先住民文化を研究している文化人類学者，考古学者，そして言語学者らとともに研究の現状と課題を共有することが必要であると考え，国立民族学博物館共同研究「環北太平洋地域の先住民社会の変化，現状，未来に

関する学際的比較研究――人類史的視点から」(2020.10-2023.3) を2020年秋に開始した。

2.1 共同研究の目的

本共同研究の目的は，これまでの研究史を踏まえて「北太平洋地域の先住民の諸言語・諸社会・諸文化の変化と現状，未来について，(1) 自律期，(2) 接触期，(3) 植民地期，(4) 国家による同化期，(5) 政治的自律化期，(6) 未来の6つの時期に分けて，(1) 歴史・考古学，(2) 言語学，(3) 文化人類学の視点から学際的に比較検証し，その異同の諸側面を総合的に解明するとともに，同地域の先住民社会の未来を構想することである」(国立民族学博物館，共同研究ウェブサイト参照)。言い換えれば，北太平洋東西沿岸の先住諸民族の間にみられる文化的類似（性）と差異を理解し，さらに彼らの言語・社会・文化がどのように変化し，現状を形成し，将来的にどのように変化していくかについて解明することである（岸上 2021a: 17; 2021b: 4–5)。この共同研究プロジェクトの目的は，かつてのジェサップ北太平洋調査や言語調査プロジェクトが解明にいたらなかった，先住民族間の文化や社会の歴史的関係の実証に貢献することである。この目的を達成するために，共同研究員が各自のデータを持ち寄り，共同研究会で報告し，検討を加えることを基本とした。

このプロジェクトの新規性は，北太平洋地域の先住民の諸言語・諸社会・諸文化の現状と未来を研究対象に加えたことである。

2.2 共同研究員の構成

日本国内における環北太平洋地域における先住民の文化や言語に関する研究動向に関する情報（岸上 2015）をもとに，共同研究員の人選を行った。国立民族学博物館の共同研究では，１件につき15名以内の共同研究員数が望ましいとされている。この条件を加味して研究対象地域・民族・研究方法を検討した結果，本研究会のメンバーは，考古学者３名，言語学者２名，人類学者12名から構成することにした。すなわち，旧大陸側地域に関する研究者は，加藤博文（考古学，シベリア），高瀬克典（考古学，千島・樺太・カムチャツカ半島），呉人惠（言語学，カムチャツカ半島），高倉浩樹（文化人類学，シベリア），大石侑香（生態人類学，シベリア），大坂拓（文化人類学，アイヌ物質文化），関口由彦（文化人類学，現代アイヌ文化），齋藤玲子（文化人類学，アイヌ文化），島村一平（文化人類学，モンゴル）である。一方，新大陸側地域に関する研究者は，平澤悠（考古学，アラスカ），堀博文（言語学，北西海岸地域），生田博子（文化人類学，アラスカ沿岸地域），井上敏昭（文化人類学，アラスカ内陸地域），近藤祉秋（文化人類学，アラスカ内陸地域），立川陽仁（文化人類学，北西海岸地域），野口泰弥（文化人類学，北西海岸内陸地域），岸上伸啓（文化人類学，アラスカ沿岸地域・北西海岸地域）である。

2.3 研究計画と本論文集の位置づけ

2020年度に岸上が研究の全体構想を提示し，その後，2021年度は共同研究員全員が各自のテーマを共同研究会で報告し，それに議論，検討を加えた。並行して，共同研究員は各自が専門とする調査地域・先住民族やテーマに関する最近の研究動向を調査した。そして2022年度には共同研究会を基盤に一般公開の国内シンポジウムを実施し，2023年度にはその成果を日本語の成果論文集に取りまとめる予定である。

この共同研究は2022年度末に終了予定であるが，科研基盤研究（A）「北米アラスカ・北西海岸地域における先住民文化の生成と現状，未来に関する比較研究」（課題番号：JP19H000565，2019年度～2023年度）と連携しながら実施し，2023年度には両方の研究成果として国際シンポジウムと企画展示を国立民族学博物館において開催する予定である。その成果は，英語の論文集として2023年度以降に出版する計画である。

以上から分かるように，本論文集は，本共同研究プロジェクトにおいて各共同研究員の研究対象に関する近年の研究動向を整理・検討し，環北太平洋地域の先住民文化研究の大きな流れを把握するとともに，各自の今後の研究課題を明確にするための考察を収録した論集である。

3 本論文集の内容

本論文集は，2020年度から各共同研究員が専門とする地域，（先住）民族やテーマに関する近年の研究動向を調査した結果を取りまとめた論集であり，3 部から構成される。

第 1 部はユーラシア大陸シベリア・北太平洋沿岸の先住民族の歴史・言語・文化の研究動向に関する 5 本の論文から成る。

加藤博文は，シベリア地域における集団形成史をめぐる考古学を中心とした研究動向を俯瞰的に整理し，考察を加える。その上で，遺伝子研究の発展に伴い，シベリアにおける集団形成について新しい知見がもたらされたことを紹介する。さらに現在の知見をもとに旧大陸から新大陸への人の移動についても言及している。

呉人惠は，フォーテスキュー（Fortescue）が提唱するウラル語族，ユカギール語，エスキモー・アリュート語族，そしてチュクチ・カムチャツカ語族をひとつにまとめた‘Uralo-Siberian’仮説を取り上げ，その根拠として挙げている言語間の類型的特徴を，コリャーク語に基づき検証する。その検証作業によって，個々の言語の詳細な記述研究が同仮説を部分的に修正する可能性があることを指摘する。

渡部裕は，ロシア・カムチャツカ半島の先住民に関する研究動向のなかでも主に，コリヤークやイテリメンの伝統文化，ソ連期の社会主義経済体制下の集団化政策とそれにともなう集落の再編，ソ連体制崩壊の影響，その後の先住民経済について研究を整理している。加えて，1945年 8 月のソ連対日参戦以前にロシア／ソ連領海内で行われていた

日本人による漁業にともなうカムチャツカ先住民と日本人漁業者との接触についての研究を概観する。その上で最後に今後の研究課題としてアリュートル調査の必要性を提案する。

高瀬克典と田村将人は，それぞれ千島アイヌと樺太アイヌに関する研究を整理し，検討を加える。

高瀬は，千島アイヌの起源に関する学説史を整理したうえで，考古学の観点から北海道起源説，サハリン起源説，南千島起源説の検証方法を提示し，それぞれの仮説の妥当性について論じる。サハリン島と南千島が千島アイヌの故地の候補地になりえるが，いずれの地域においてもまだ決定的な証拠が欠落していることを指摘する。

田村は19世紀以降の樺太アイヌ文化に関する研究史を整理し，紹介する。特に1995年以降は，ロシアの博物館に収蔵されているアイヌ関連の物質資料の悉皆調査が行われ，その目録が出版されたほか，アイヌ文化の展覧会が日本で開催されたことを報告する。また，当事者が樺太アイヌ協会を創設するとともに，自伝の出版などを行ったことを紹介する。

第２部は，北アメリカ大陸アラスカの先住民族の歴史や文化の研究動向に関する６本の論文から構成される。

平澤悠は，内陸アラスカおよびユーコン準州における考古学研究の動向について概説する。主に2000年以降の内陸アラスカおよびユーコン準州を対象とする研究動向に注目し，分子人類学分野や言語学分野における研究の展開と関係づけつつ，とくに北アメリカ北部におけるノーザンアーカイック伝統とアサバスカン伝統に関する議論の進展を整理し，検討する。その上でナ・デネ語族のアラスカへの到来，定着，再拡散に関連するこれらのモデルと言語および考古学的証拠の間に生じる矛盾をどのように解釈していくかが今後の課題であると指摘する。

榊原千絵は，アラスカ北西地域のイヌピアット社会に関する近年の研究動向を概観した後，人間や自然への気候変動の諸影響に関する研究動向を詳しく紹介する。アメリカやカナダにおいて気候変動の極北地域の人と自然への諸影響に関する研究は近年もっとも注目を浴び，もっとも多くの調査が実施されている研究領域である。

井上敏昭は，アラスカ（とカナダの極北地域）に住む北方アサバスカン・グィッチンの社会・文化に関する研究の歴史を跡付ける。1930年代ごろから1970年代まで文化人類学者による調査に基づく民族誌や論文の出版が主流であったが，1980年代を境としてそれまで調査される側にあった先住民による著作が出版され始めた。また，研究テーマも言語や民族文化の記録化から先住民の視点からみた社会変化に関する民族誌，自伝的民族誌の作成，先住権や土地や資源の所有・利用をめぐる実践的研究などに移行したことを提示する。

近藤祉秋は，近年アラスカ先住民で盛んに開催されている「文化キャンプ」に関する

先行研究を整理し，アラスカでの土地権益請求以降に展開されてきた生業文化の再活性化に関する研究動向を紹介する。その上で，アラスカ先住民社会での生業文化の再活性化をめぐる研究の状況と今後の展望について述べている。

生田博子と久保田亮は，アラスカ州南西部に広がるユーコン川（Yukon River）とクスコクイン川（Kuskokwim River）により形成されたデルタ地帯に生きる先住民に関する諸研究のうち，生業，野生動物管理，金鉱開発に関わる研究を整理し，紹介するとともに，彼らの現代生活における生業の重要性を指摘する。その上で，生業経済における貨幣の位置づけや経済開発の諸影響など今後の研究課題を提起する。

野口泰弥は，環北太平洋地域における威信財に関する研究の展開を人類学における階層化などの研究と関連させながら，整理し，検討する。彼は，環北太平洋地域における威信財の研究の必要性と可能性を主張している。

第 3 部は，北アメリカ北西海岸の先住民族の歴史・言語・文化の研究動向に関する 5 本の論文から構成される。

林千恵子は，アラスカ先住民トリンギットの口承物語に関する，19世紀から現在までの研究の変遷を，A. クラウス（Krause），G. T. エモンズ（Emmons），J. スワントン（Swanton），F. デ・ラグナ（de Laguna）やダウエンハウアー（Dauenhauer）夫妻による主要研究をもとに整理し，研究の展開を明らかにする。その上で，今後の課題を提起している。

堀博文と岸上伸啓はそれぞれハイダ民族の言語の系統論とハイダ民族に関する研究動向について整理し，検討を加える。

堀は，ハイダ語がナ・デネ語族に帰属するという説の当否をめぐって，1990年代までとそれ以降に分け，それぞれの時代において出された諸説を紹介し，考察している。さらに，ナ・デネ語族に関する最近の研究の展開を略述するとともに，ハイダ語の系統関係を解明する上での問題点や課題，意義について考察している。

岸上は，ハイダ・グワイとアラスカ南東部に生活の拠点を有するハイダ民族に関する研究動向について紹介し，今後の研究課題を提起する。かつては文化人類学的研究が主流であったが，近年では環境保護や資源論，土地権，教育問題など先住民が直面している諸問題に関する応用的な研究が大多数を占めるようになったことを報告している。

永井文也と立川陽仁は，特定の民族ではなくそれぞれカナダ国ブリティッシュ・コロンビア州における先住民族の土地権をめぐる研究動向，北アメリカ北西海岸地域全域の環境論史研究の動向について概観し，検討を加える。

永井は，カナダ国ブリティッシュ・コロンビア州における先住民族の土地権をめぐる研究動向について整理し，検討を加え，今後の課題を提起する。従来は歴史的な研究が中心になされてきたが，コルダー裁判の判決以降は，裁判プロセスや条約プロセスに焦点を当てる研究が増加した。今後は先住民法の承認と尊重や，日常生活の視座から権利

運動を検討することの重要性などを指摘している。

立川は，北アメリカ地域における環境に関する研究動向について紹介し，考察を加える。20世紀末までの環境に関する研究は生態人類学的な研究が主流であったが，21世紀に入ると，環境問題への対応のために先住民の伝統的生態学的知識（Traditional Ecological Knowledge）に関する研究や気候変動の影響，その対策をめぐる資源論などが主流化した。また，人類学的研究が多様化したことを指摘している。

そして「おわりに」において岸上伸啓は本論文集の成果を要約し，今後の研究課題について述べる。

本論文集は，環北太平洋地域の先住民社会の近年の研究動向の全てを網羅したものではないが，各共同研究員の研究対象の地域や民族，テーマについての研究史を整理し，検討を加えたものである。この論集によって，各自は自らの研究課題を明確化することができるとともに，読者も環北太平洋地域の先住民研究において何が研究の焦点や課題となっているかを知ることができる。筆者らは本論文集を出発点として共同研究プロジェクトをさらに推し進めるとともに，日本における環北太平洋地域の先住民研究がさらに発展することを期待したい。

謝辞

本論文集は，国立民族学博物館共同研究「環北太平洋地域の先住民社会の変化，現状，未来に関する学際的比較研究 ── 人類史的視点から」（2020.10-2023.3）および科研基盤研究（A）「北米アラスカ・北西海岸地域における先住民文化の生成と現状，未来に関する比較研究」（課題番号：JP19H000565，2019年度～2023年度）の研究成果の一部である。国立民族学博物館および日本学術振興会に感謝の微意をささげたい。また，編集において岸上研究室の生田節子さんと中村真里絵さんからご助力を頂戴した。記して感謝する次第である。

注

1）「はじめに」の前半は，岸上（2021a）に基づいている。

参照文献

＜和文＞

大塚和義編

2001　『ラッコとガラス玉 ── 北太平洋の先住民交易』大阪：千里文化財団。

2003　『北太平洋の先住民交易と工芸』京都：思文閣。

岸上伸啓
2015 「環北太平洋沿岸地域の先住民文化に関する人類学研究の歴史と現状──日本人による文化人類学的研究を中心に」岸上伸啓編『環北太平洋地域の先住民文化』（国立民族学博物館調査報告 132）pp. 7–77，大阪：国立民族学博物館。
2021a「北太平洋先住民社会に関する比較研究構想」『民博通信 Online』3: 16–17。
2021b「北米アラスカ・北西海岸地域研究から見た環北太平洋沿岸諸先住民族文化の比較研究の展望」北海道立北方民族博物館編『環北太平洋地域の伝統と文化 4 アラスカ・ユーコン地域』（第34回北方民族文化シンポジウム網走報告書）pp. 1–6，網走：北方文化振興協会。
岸上伸啓編
2015 『環北太平洋地域の先住民文化』（国立民族学博物館調査報告 132）大阪：国立民族学博物館。
谷本一之・井上紘一編
2009 『「渡鴉のアーチ」（1903–2002）──ジェサップ北太平洋調査を追試検証する』（国立民族学博物館調査報告 82）大阪：国立民族学博物館。
宮岡伯人編
1992 『北の言語──類型と歴史』東京：三省堂。

＜欧文＞
Boas, F.
1968 The Jesup North Pacific Expedition. In *International Congress of Americanists: Thirteenth Session Held in New York 1902*, pp. 91–100. Nendeln and Liechtenstein: Kraus Reprint.
2001 The Results of the Jesup Expedition: Opening Address at the 16th International Congress of the Americanists, Vienna 1908. In I. Krupnik and W. W. Fitzhugh (eds.) *Gateways: Exploring the Legacy of the Jesup North Pacific Expedition, 1807–1902*, pp. 17–24. Washington DC: Arctic Studies Center, National Museum of Natural History, Smithsonian Institution.
Fitzhugh, W. W. and A. Crowell
1988 Crossroads of Continents: Beringian Oecumene. In W. W. Fitzhugh and A. Crowell (eds.) *Crossroads of Continents: Cultures of Siberia and Alaska*, pp. 9–16. Washington DC: Smithsonian Institution Press.
Kendall, L. and I. Krupnik (eds.)
2003 *Constructing Cultures Then and Now: Celebrating Franz Boas and the Jesup North Pacific Expedition* (Contribution to Circumpolar Anthropology 4). Washington DC: Arctic Studies Center, National Museum of Natural History, Smithsonian Institution.

＜ウェブサイト＞
国立民族学博物館
「環北太平洋地域の先住民社会の変化，現状，未来に関する学際的比較研究──人類史的視点から」https://www.minpaku.ac.jp/post-project/12743（2021年12月19日閲覧）
「北米アラスカ・北西海岸地域における先住民文化の生成と現状，未来に関する比較研究（2019–2023）」https://www.r.minpaku.ac.jp/inuit/（2021年12月19日閲覧）